

宮臨技学術部 研修会報告書 平成 27 年度 作成者 高崎 健司	
研修会名	平成 26 年度精度管理病理部門 フォローアップ研修会
担当分野	病理部門
開催日時	平成 27 年 5 月 23 日 (土) 14 : 00 ~ 17 : 00
開催会場	宮城県立こども病院 愛子ホール
参加人数	会員 30 名、非会員 0 名、合計 30 名
研修内容 (感想を含 めて)	<p>1. 平成 25 年度病理部門精度管理調査報告・検討 演者：宮城県立こども病院 高崎健司技師 宮城県対がん協会がん検診センター 高橋期子技師</p> <p>高崎技師から平成 26 年度病理部門精度管理調査報告として昨年行われた病理部門の精度管理項目「PAS 染色、d-PAS 染色」について、宮臨技の報告会では時間の都合上詳しく説明できなかった詳細な分析を報告された。</p> <p>高崎技師から枯草菌由来 α-アミラーゼによるグリコーゲン消化の最適条件を緩衝液の pH と反応温度についてと、酸化剤の種類や試薬劣化についての検討内容が報告された。枯草菌由来 α-アミラーゼは、唾液由来の最適 pH6.8 と異なり pH6.0 で最適であり、α-アミラーゼの仕様書では最適温度は 65°C ~ 70°C となっているが、病理組織標本では 37°C でも差がほとんど無いとの報告であった。酸化剤で用いられているオルト過ヨウ素酸とメタ過ヨウ素酸カリウムの比較ではオルト過ヨウ素酸の酸化力が強く塩酸の添加が不要で試薬調製時のミスが起こりにくい。また蒸留水の持ち込みによって起こる試薬劣化に対して安定性があることから精度管理に有用との考えが示された。</p> <p>高橋技師からは PAS 染色で用いられるシッフ試薬について反応温度と保存状況の違いによる試薬劣化を原因とした染色性への影響についてコールドシッフ試薬、ポイルドシッフ試薬それぞれについて報告された。コールドシッフ、ポイルドシッフともに 4°C より室温の方が短時間で良好に染色され、また保存方法は冷蔵で密閉した状態で長期保存が可能で密閉されていないものは約 8 週間で染色性の低下が認められる事が報告された。</p> <p>これらの事を理解して PAS 染色、d-PAS 染色を行う事が重要だと考えた。</p> <p>2. 消化管と肝組織における P A S 染色</p>

	<p>演者：宮城県立こども病院 臨床病理科 武山淳二 先生</p> <p>武山先生には平成26年度病理部門精度管理調査における総評を述べていただき評価のポイントや病理医に立場から見やすい標本についての意見を聞くことができた。また、PAS染色、d-PAS染色が有用な消化管と肝組織の病態について講義をしていただいた。消化管では、低分化な腺癌の鑑別、腺癌と黄色腫の鑑別、カンジダの検出など、また肝臓ではウイルス性肝炎や自己免疫性肝炎で認められる interface hepatitis の診断やd-PASでは色素性組織球に増加を見ることによって肝障害を間接的に判断している事などを教わることができた。また、実際に経験した糖代謝異常の症例では肝臓にグリコーゲンが過剰に蓄積したことによって、グリコーゲンの溶出が起これりPAS染色で良好な結果を得る事ができなかったが、ツェロイジン皮膜を使用した方法で改善できる事など講義された。実際に診断している病理医の講義は非常に有意義であった。</p> <p>3. 免疫染色によるALK融合遺伝子陽性肺癌の診断</p> <p>演者：株式会社 ニチレイバイオサイエンス 分子診断事業部 長嶋 健二 先生</p> <p>近年、非小細胞性肺癌に対する分子標的薬としてEGFR、KRAS、c-MET、BRAFなど遺伝子変異や遺伝子増幅による癌遺伝子の異常活性化を標的とした多くの薬剤が開発されている。新たな標的として、EML4-ALK融合遺伝子が同定された。抗癌剤であるALK阻害剤（クリゾチニブ）のコンパニオン診断の方法として、これまでFISH法を用いていたが、より簡便な方法として免疫染色キットが開発され、FISH法との陽性一致率98.0%、陰性一致率99.0%、全体一致率98.8%と非常に高い相関が示されている。ALK阻害剤による治療対象をより早く確実に区別することができ医療現場における治療戦略の早期立案と治療開始時期の短縮に繋がり、患者の治療に貢献できるとの事で病理診断において最先端の知識を得る事ができた。</p>
<p>総括</p>	<p>大変活発な研修会が開催できた。県の報告会の補足のため、また精度管理事業自体が大変貴重な研修会の資料となりうるため、やはりフォローアップ研修会は来年度以降も継続していかなければならないと考えた。会の運営に携わった実務委員をはじめ講師の先生方にも感謝いたします。</p>

